

令和3年度あいちラーニング推進事業研究報告書

学校番号 82  
 学校名 愛知県立 大府 高等学校  
 校長氏名 馬場 茂

研究責任者職・氏名	教諭・石神有介	事務担当者職・氏名	主事・小林 弘
研究テーマ	ICTを活用した主体的・対話的で深い学びを推進するための取組 ～生徒用タブレットの効果的な活用方法の研究～		
本年度の研究目標	(1)「主体的・対話的で深い学び」の視点を重視した授業改善に取り組む。 (2)「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、生徒用タブレットの効果的な活用方法を模索する。 (3) 生徒用タブレットの活用に向けて、利用規約や導入ガイドラインを策定する。 ((1)～(3)の成果を生徒向けのアンケートや考査、実技試験における「思考力・判断力・表現力」を重視した問題の出題を通し、本課題の評価を行う。)		
研究の実施内容			
実施月日	内 容		備 考 (対象生徒等)
5月17日	<b>【全日制】</b> 第1回研究推進委員会 ・研究推進委員の顔合わせ ・本事業の趣旨、今後の取組方針の確認 ・各教科への確認事項、検討事項の依頼		
5月24日	生徒用タブレット端末(957台)各クラス配付		
5月27日			
6月11日	高等学校教育課学校訪問 (あいちラーニング推進事業の一環として地歴公民科の授業を参観)		
6月18日	第2回情報化推進委員会 ・生徒用タブレット端末の利用状況の共有 ・情報端末利用規約および規約運用規定の検討		
7月5日	第2回研究推進委員会 ・公開授業についての連絡 ・各教科からのタブレット端末の利用方法の意見共有 ・授業でのICT機器利用の実践例提出の依頼 ・情報端末利用規約の運用などに関する連絡		
7月26日	地区の重点校(半田東, 常滑, 大府東)対象の第1回連絡協議会 ・令和元年度から令和3年度までの主管校における実践報告 ・重点校の今後の研究計画に関する情報交換 ・今後の予定の確認		
7月30日	保健体育科 事前指導(名古屋学院大学 四方田健二 准教授)		
8月27日	地歴公民科 事前指導(名古屋文理大学 中村 麻理 教授)		
10月4日	第3回研究推進委員会 ・公開授業についての連絡 ・生徒用タブレット端末の取り扱いに関する変更点の説明		

10月25日   11月12日 11月4日 11月9日 11月12日 11月16日 11月17日 1月27日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級閉鎖などへの対応に関する説明</li> <li>公開授業週間（3週間）</li> <li>・各教科の研究授業者（2～3名）による授業の実施</li> </ul> <p>重点校の公開授業（愛知県立常滑高等学校）</p> <p>重点校の公開授業（愛知県立大府東高等学校）</p> <p>令和3年度あいちラーニング推進事業研究成果合同発表会</p> <p>重点科目（地歴公民・保健体育科）の公開授業および研究協議</p> <p>重点校の公開授業（愛知県立半田東高等学校）</p> <p>地区の重点校（半田東，常滑，大府東）対象の第2回連絡協議会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各校の本年度の研究に関する実践報告</li> </ul>
6月24日 9月16日 10月4日 11月16日 1月20日 1月28日	<p><b>【定時制】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・職員会議（事業説明、昨年度の取組確認、研究担当者決定）</li> <li>・職員会議（ICT活用情報交換）</li> <li>・職員会議（公開授業打合せ）</li> <li>・公開授業及び振り返り（短時間の協議）</li> <li>・校内公開授業</li> <li>・校内公開授業</li> </ul>

研究 成 果 の 評 価 及 び 普 及 ・ 還 元 に 関 す る 実 績

## 1 研究内容＜全日制課程の取組＞

### A) 組織の発足

昨年度新設した「研究推進委員会」を，本年度も継続した。各教科の「研究推進委員」は，定期的  
に実施される「研究推進委員会」において意見交換を行い，教科会にてその成果を伝達し，全教員に  
授業改善への具体的方策や他教科の進捗状況，ICT機器を利用した効果的な指導法について考える機  
会を提供した。

### B) 取組課題の設定

一昨年度より本事業に取り組む上で，以下の点（およびその具体的方策）に留意した。

（5，6に関しては，今年度変更および追加した内容である）

- 1 教科会で，授業での問いの工夫（生徒達に考える習慣を定着させる内容）や，教材・教具  
の工夫，教師同士での内容の振り返りなどの議論を行うなど，教科会の充実を図り，授業改  
善につなげる。
- 2 授業改善により，定期考査の問題が思考力・判断力を問うような出題内容になるように，  
教科担当・学年を越えて議論し問題作成に取り組む。また，昨年度から継続して，思考力・  
判断力を評価する出題を可能とするために，科目ごとに定期考査の解答時間の延長を認め  
る。
- 3 パフォーマンス課題やルーブリックを開発し，観点別学習状況評価を充実させるための取  
り組みを行う。
- 4 公開授業では授業者が授業の狙いを明確にし，参観者と共に振り返りを行うことができる  
シートを用い，お互いの指導改善につなげる。
- 5 研究授業（全科目）を進める上で以下の具体的方策を採用する。
  - (1) 生徒1人1台タブレットを効果的に活用した授業の展開  
(機器の特性を最大限に活用した双方向授業の展開)
  - (2) 従来のICT機器を利用した授業の枠にとられないクリエイティブな授業の創造
  - (3) コロナウイルス感染拡大防止による再度の臨時休校に備えた，オンライン教育の可能性  
の模索（タブレットの持ち帰りを踏まえた家庭での学習支援や休業課題の設定）

※詳細はD) 具体的方策の実践例にて紹介

- 6 生徒用タブレットに関する利用規約や導入ガイドラインを策定する。生徒用タブレットを活用した授業などを実践することで、策定した使用規定や導入ガイドラインが実際の運用に耐えうるかどうかを検証し、改善する。

## C) 生徒用1人1台タブレットの導入と利用規約の策定

### タブレットの導入

今年度より、1人1台タブレットおよびタブレット用の充電保管庫が導入された。導入までの大まかな流れは以下の通りである。

- 1 初期設定および動作確認
- 2 充電保管庫の設置および充電計画の設定
- 3 端末の配付および設定

1の初期設定および動作確認は、図書情報部の教員で行った。その際、初期設定の段階で下記の問題が生じた。

- ・本体の初期不良
- ・電源コードの断線
- ・アプリケーションのインストール不良
- ・充電時にディスプレイが暗い
- ・不穏な音が一瞬出る

また、動作確認の段階では、以下の問題が生じた。

- ・Microsoft Teamsのショートカットが存在しない
- ・ディスプレイが表示されない

初期不良端末と電源コードについては交換対応となり、その他の端末については回復ドライブを使用することで対応できた。

5月下旬に各クラスに配備できるようにするため、充電保管庫の設置と充電計画の設定を図書情報部が事前に行った。タブレットの導入時には、それぞれの端末でWi-Fiへの接続などの設定が必要なため、学年単位で端末配付のための時間を設けた。この時間内に行う必要があった項目は以下の通りである。

- ・充電保管庫への電源コードの接続
- ・生徒用アカウント用紙の配付と確認
- ・タブレットの設定

タブレットの設定は、Wi-Fiへの同時接続台数が多いと接続ができない端末が増えるため、クラス(40名)を半分ずつ前後半に分けて行った。しかし、学年全体で同時に設定を行ったため、クラスで20名程度の同時接続でも、接続に時間のかかる端末が複数存在し、作業にかなりの時間を要した。電源コードの接続は、各クラスの生徒2名に事前に接続方法を指導し、この生徒を中心に作業を行った。電源コードの接続作業では、特に問題は生じなかった。

導入後は、後述の利用規約および規約運用規定の策定の他、タブレットの持ち帰りを想定し、家庭のインターネット環境調査を行った。

### 利用規約および規約運用規定の策定

タブレットの導入と並行して、生徒一人一台タブレットの利用規約と規約運用規定(以下、規約)の作成を始めた。規約策定にあたり、まずあいちラーニング推進事業担当者が作成した原案を各教科会に下ろし、意見を集約した。その後、意見をもとに修正した原案を「情報化推進委員会」で検討した。教科会では、主に「生徒がタブレットを使用する際に必要なルール」という観点で規約の内容を検討した。情報化推進委員会では、「タブレット端末そのものの取り扱いに関するルール」という観点で規約の内容を検討した。その後、職員会議での周知を経て、運用が開始された。生徒には、あいちラーニング推進事業の担当者から、規約についての説明を全クラス一斉放送にて行った。今回策定された規約は、充電保管庫の鍵を常に職員室で管理し、担任(副担任)または授業担当者が鍵の開錠を行うことを原則に作った。また、規約の策定と同時に、タブレットの持出管理簿を作成した。通常の授業日に持ち出す場合と長期休業中に持ち出す場合とで、2種類の管理簿を作成し運用した。

実際に規約の運用を始めると、「充電保管庫の鍵を職員室で管理し、担任または授業担当者が開錠する」という点が、授業でのタブレット使用の障壁となるという意見が多く挙げられた。その理由としては、下記の3点が考えられる。

- ・生徒は教員がいないとタブレットの使用準備ができないため、授業開始から準備の時間を取られる。
- ・生徒に休み時間や放課後にタブレットを使用させたい場合、担任（副担任）に教科担当者から申し出ておかないとならないため、連絡がうまくいかないと生徒の作業が滞る。
- ・生徒が教員に申し出ることが億劫で、タブレットを使おうとする生徒があまりいない。

鍵の管理を徹底し、タブレットの紛失や無断使用などが起こりにくいようにすることに重点を置いた結果、生徒が自由にタブレットを使用しづらい環境になり、普及にブレーキをかけてしまった。このことを踏まえ、生徒も教員もよりタブレットを使用しやすい環境にするために、規約の内容を変更することにした。変更案は、以下の3点である。

- ・充電保管庫の鍵を出席簿に付属させる。
- ・家庭へ持ち帰る場合は、生徒が各自で持出管理簿に記入する。
- ・担任（副担任）は定期考査ごとに持出管理簿の記入内容と充電保管庫内のタブレットの保管状況を確認する。

現在、この変更案を情報化推進委員会で検討し、来年度までには新しい規約として運用を開始できるように調整中である。

規約には、生徒がタブレットを安全に使用できること、および学習活動のために自由に使用できることの両立を求められる。今後も規約を運用していく中で、生徒の教育活動が充実したものになるようにサポートできる規約を目指して改善を続けていきたい。

## D) 具体的方策の実践例

### 事例1 3年生 現代文B

現代文の授業では、「人はなぜ働かなくてはならないか」というテーマについて、授業の導入時に自分の考える働く理由をロイロノートで回答させた。その後、ロイロノートでそれぞれの意見を共有させた。同様に、「仕事をやめる理由」について、いくつかの選択肢の中から、ロイロノート上で回答させて集約した。これらも共有させた。

ロイロノートのアンケート機能は、回答結果を即時的に集約および共有できるため、短時間で生徒の意見をクラス全体で共有したい場合に最適である。この結果をもとに、新たな思考活動を広げたり、今後の授業の展開を検討したりと、さまざまな場面で活用が可能であると考えられる。

現代文の補習では、問題演習においてアンケート機能を活用した。共通テスト対策問題集を使用しているので、設問はすべて選択式である。生徒がどの選択肢を選んだか、スタディサプリのアンケート機能、ロイロノートのアンケート機能およびテスト機能を使い、回答を集約した。その後、それぞれの問題に対する正答率と誤答率を確認し、生徒にも共有した。この結果をもとに、その場で解説すべき問題や選択肢を選ぶことで、授業を効率的に進めることができた。今回使用した機能のうち、ロイロノートのテスト機能が本活動に最も適していたと感じた。

### 事例2 2年生理系 化学

問題演習において、問題の小問を考えるグループワークを実施した。その際、小問をロイロノートのテスト機能を利用して作成させた。提出させた問題は提出箱の共有機能を利用してクラス全体に共有し、別のグループの問題に回答できるようにした。問題に回答した後、その問題をつくったグループに問題に対するコメントを送付させ、簡易的な相互評価を行った。

ロイロノートは、それぞれの意見や考えを共有することが容易であり、テスト機能であれば、お互いの問題を



図 ロイロノートによるアンケート結果

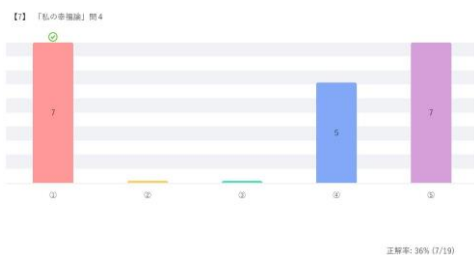


図 ロイロノートのテスト機能①



図 ロイロノートのテスト機能②

解き合うことも可能である。ロイロノートの使用により、さまざまな協働的活動を授業に取り入れやすくなると感じた。

活動中に生じた問題点として、テストの作成者がアカウントに紐づけられるため、グループの代表がつくと他の班員のアカウントでは編集ができない点が挙げられる。代表者が欠席した場合、その問題は編集ができず、新たに別の班員が1から作り直すことになった。班活動の際は、欠席者が生じた場合の対処を事前に考えておく必要があると感じた。また、ロイロノートのテスト機能は、自由記述の問題は採点機能が使用できない。そのため、テスト機能の良さを最大限に発揮させることを考えると、選択問題を作成することが望ましく、問題の作成の自由度が制限された。表現が制限されることで、生徒の考えや個性が反映されにくい活動になってしまい、それぞれの機能の特長を理解することが必要であると感じた。

### 事例3 3年生 生理系 化学

有機化合物のアルコール、エーテル学習後に振り返りとしてロイロノートのシンキングツールのベン図を用いた活動を実施した。本活動は知識の整理、表現力の育成を狙いとした。設定した評価規準に基づき、ABCの3段階で評価し、生徒に返却した。

ロイロノートのシンキングツールにはさまざまな様式が存在し、活動の趣旨に応じたものを使用することで、効果的に学習活動を行うことができると考える。しかし、適する様式を選択するためには、それぞれのシンキングツールの意図や使用方法を理解しなくてはならず、学習活動の目標や目的に沿ったツールを選ぶためには、多くの知識と経験が必要であると感じた。

今後は、新学習指導要領の観点別学習状況の評価のうち「主体的に学習に取り組む態度」の評価につなげるために、他の生徒のベン図または、採点後のベン図を見ることにより、自分が記入した時と比較してどのような変容があったのか振り返りをさせる場面をつくることも考えている。

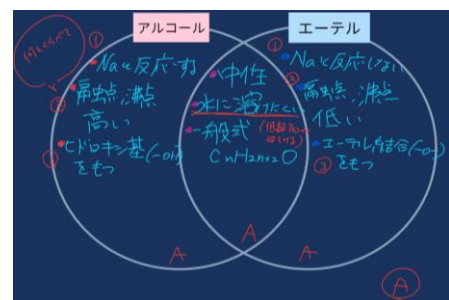


図 シンキングツール（ベン図）

	A	B	C
750-6 1-F8共通点	3点記載がある。 一般式、中性である。 水に溶けにくい（低級750-6は溶ける）等の記入がある。（構造異性体の関係）	2点記載がある。	1点記載、または記載なし
750-6	Na金属と反応して水素が発生するなど3つ以上記載がある。 エーテルと並列して記載がある。	2点記載がある。	1点記載がある。
1-F8	3つ以上記載がある。 750-6と並列して記載がある。	2点記載がある。	1点記載がある。

総合A：AAA, AAB 総合B：AAC, ABC, ABB, BBB 総合C：ACC, BBC, BCC

表 活動の評価規準

### 事例4 1, 2年生 総合的な探究の時間

総合的な探究の時間に、SDGsを題材にした探究活動を実施した。

#### 1 課題の設定

夏休みの課題に、『SDGs17 目標の達成可能性推測マップ』を作ることができるカードを準備し配信した。カードの中にSDGsのロゴ17枚を入れ、自分が「参画できる内容だと感じる」目標のロゴをマップの上に移動し、また社会全体において「目標達成可能性」について達成可能と思われる目標を右に移動させるよう指示した。

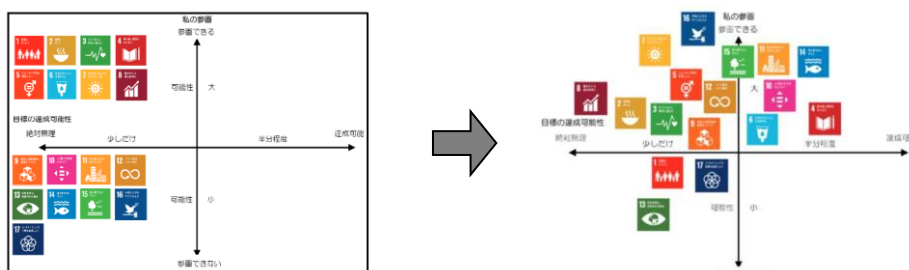


図 目標達成可能性マップ（左：生徒に配信したカード，右：生徒が提出したカード）

#### 2 情報の収集

2枚目のカードには、先ほどのカードの右上に置いた目標について、なぜその目標を選んだのか理由を記入させた。情報を収集し、「将来自分が大学で学んだことを活かそうだから」「社会ではすでにこのような取り組みが行われているから」などの視点で書いてみるように指示をした。

#### 3 情報の整理および分析





り、アンケートの質問の中にクラス番号を問う内容のものを入れなくてはならない場合もある。また、アンケートの作成者しか回答の状況を確認できないアプリケーションもあり、担任が未回答の生徒に対する対応を取りにくい。アンケートの実施前に、生徒全員がアプリケーションを問題なく立ち上げられるか確認することも必要で、IDやパスワードがわからずアンケートの回答ができない生徒もいた。いくつかの問題点はあったものの、業務の効率化を考えると積極的に使用していくのが望ましいと感じた。

### 事例2 ロイロノートを用いた健康調査

ロイロノートには「出欠連絡」という機能が存在する。今年度、一部のクラスで試験的に出欠連絡機能を用いて、出欠および健康観察の調査を実施した。朝のSTまでにロイロノートで用意した出欠連絡のカードに記入し、提出するように指示した。基本的には、家でスマートフォンなどを使い、回答するように指示した。スマートフォンで回答ができない生徒や家で回答することを忘れた生徒は、担任が充電保管庫をST前に開けておき、STまでに教室で回答するように指示した。朝のST時に全員提出されているか確認し、体温や体調を確認した。1枚1枚確認する必要もなく、問題のあるものは一目でわかるので時間短縮ができ便利だと感じた。

学籍番号	名前	学年	出欠	体温	備考
00114	山田 太郎	高校 1年	●出席	36.2℃	異常なし
00115	田中 花子	高校 1年	●出席	36.3℃	異常なし
00116	佐藤 健太	高校 1年	●出席	36.1℃	異常なし
00117	鈴木 美咲	高校 1年	●出席	36.4℃	異常なし
00118	高橋 誠	高校 1年	●出席	36.2℃	異常なし
00119	渡辺 真由	高校 1年	●出席	36.3℃	異常なし
00120	小林 悠斗	高校 1年	●出席	36.1℃	異常なし
00121	山本 莉子	高校 1年	●出席	36.4℃	異常なし
00122	佐々木 大輔	高校 1年	●出席	36.2℃	異常なし
00123	松本 千尋	高校 1年	●出席	36.3℃	異常なし
00124	石川 拓也	高校 1年	●出席	36.1℃	異常なし
00125	山口 舞	高校 1年	●出席	36.4℃	異常なし
00126	北川 翔	高校 1年	●出席	36.2℃	異常なし
00127	藤田 結衣	高校 1年	●出席	36.3℃	異常なし
00128	森田 隼	高校 1年	●出席	36.1℃	異常なし
00129	山崎 光	高校 1年	●出席	36.4℃	異常なし
00130	水野 遥	高校 1年	●出席	36.2℃	異常なし

図 ロイロノートによる健康調査

しかし、カードを生徒に送った後、回答していない生徒がいた場合、管理画面上に未回答の生徒の名前が載らないため、回答していないことに気づけないことがあった。実施前に、生徒にテスト回答させ、全員の名前が名簿に存在するかを確認しておく必要がある。

### 事例3 Microsoft Teams を利用した欠席連絡

新型コロナウイルス感染症の流行などにより、今年度は欠席や遅刻に関する保護者からの電話連絡が多かった。そこで、Microsoft Teams（以下 Teams）を利用して保護者が電話を使わずに欠席連絡ができるように整備した。

まず、Teams 内にある「Microsoft Forms」の機能を利用して、欠席連絡用の回答フォームを作成した。この回答フォームは Teams に所属していなくても、リンクやQRコードなどを用いることで所属外の人たちからも回答ができる。次に、保護者宛に回答フォームへアクセスできるリンクをメールで配信し、保護者が欠席に関する回答をできるようにした。保護者からの回答は、即時的に Excel のデータとしてまとめられ、各クラスの担任が当日の欠席者などの一覧を確認することができる。これにより、朝の欠席者の集約が効率的に行えるようになった。

問題点として、回答を受け付ける時間に制限をかけることができず、朝のST開始後に連絡する家庭もあるため、ST後も担任が確認しなくてはならない場合があった。また、電話で連絡をすることよりも、学校へ連絡することのハードルが下がり、欠席者が増える原因にもなるのではないかという意見もあった。Teams で連絡ができて、担任が後に家庭連絡をしなくてはならない場合も多く、単純に多忙化を解消することに繋がられない側面もあると考えられる。

### 事例4 やむを得ず学校に登校できない生徒に対するオンラインによる学習支援（資料3）

新型コロナウイルス感染症に罹患、または濃厚接触者となった場合、1週間程度登校できなくなる。また、新型コロナウイルス感染症に限らず、病気や怪我などで長期間欠席を余儀なくされるケースも珍しくない。これまでは、欠席期間中の学習を支援するとすると、課題を作成して渡すなどの対応を取るしかできなかった。しかし、生徒1人1台タブレットの配備や校内のインターネット環境の整備が進んだことで、欠席中の生徒に対しオンラインによる学習支援が実施できるようになった。具体的には、Teams のビデオ会議機能を利用することで、該当生徒が所属クラスの授業を家庭で視聴できるようにした。

欠席中の生徒またはその保護者はオンラインによる学習支援を希望する場合、まずは「学習支援願」（資料4）を学校へ提出する。オンラインによる学習支援を実施する際の条件は、

- 1 病気やけがによる欠席や、出席停止に該当する日数が、一週間以上程度見込まれること。
- 2 該当生徒および保護者がオンラインにおける学習支援を希望していること。
- 3 校長が学習支援の必要性を認めること。
- 4 病気やけがなどによる場合には、主治医と確認し、学習することで心身に支障をきたす恐れがないこと。

の4点とした。オンラインによる学習支援が決定した場合、該当生徒にはタブレットを持ち帰らせ、該当クラスには撮影用のタブレットが配備される。撮影用のタブレットは、各クラスの図書委員が

設置および配信操作を行い、移動教室の際は同じ教室の生徒が機器の設置および配信操作を行うこととした。これにより、毎時間教員が撮影用タブレットを準備する負担が減り、授業もスムーズに開始することができている。

現状、大きな問題点は報告されていないが、視聴している生徒からやや黒板が見えづらいという意見が出ている。また、教員が撮影用タブレットの画面を見ながら授業を実施しようとするインカメラで授業を撮影することになる。この場合、視聴している生徒には黒板が左右反転して映ってしまうため、生徒の様子を同時に確認したいときは、撮影用とは別のタブレットで会議に参加しておく必要がある。

ハード面で改善が必要な点はあるものの、授業に出ることのできない生徒の学習支援として、授業の配信は一定の効果があると感じている。

## F) まとめ

県立高等学校教育課題研究指定校事業として1年間、あいちラーニング推進事業として2年間、「主体的・対話的で深い学びを推進するための取組」をテーマに研究を続けてきた。昨年度からICTの効果的な活用をテーマに加えたが、今年度からは愛知県教育委員会から生徒1人1台タブレットの貸与によって、授業改善が飛躍的に進んだ。また、タブレットの活用方法も含めたより発展的な研究にも取り組むことができたと考える。

「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業を実践していくうえで、タブレットを活用することの利点としては、以下の2点が挙げられる。

第一に、**生徒同士の意見共有が容易に行える**点である。ICTを活用しない場合、生徒間で意見の共有を行う方法として「口頭による発表」や「各生徒の意見を用紙にまとめ配付する」などが考えられる。前者は即時的ではあるが、一部の生徒の意見を共有するに留まる。後者は広く共有できるが、準備に時間がかかる。それに対し、ICTを利用する場合は、アプリケーションの共有機能を使うことで、即時的にクラス全体の意見を共有することが可能である。公開授業に対する生徒アンケートでは、他生徒との意見交換を望む声が多かった。アンケート結果からも、ICTを利用した意見共有は生徒の主体性や協働性を伸ばすことに繋がると考えられ、積極的に導入する価値は高いと言える。

次に、**生徒がさまざまな形で考えを表現できる**点である。生徒に発言や作文を課すことで、自身の考えを表現させる場面を設けることはよくある。しかし、人前で発言することや文章を書くことが苦手である生徒は少なからず存在する。このような生徒に発言や作文によって考えを表現することを促しても、うまくいかない場合が多い。これは、表現の方法が「発言」や「作文」に限定されてしまっていることに問題があると考えられる。タブレットを活用することで、声や文章による表現はもちろん、選択式のアンケートやドラッグ&ドロップなどのタッチ操作を利用した解答方法など、さまざまな形で表現させることが可能になる。普段あまり発言をしない生徒でも、出力の方法を変えることで考えを発信することのハードルが下がれば、より主体的、協働的な活動に取り組みやすくなると考える。

ICTを活用した主体的・対話的で深い学びを推進するために考えていくべき課題としては、以下の2点が挙げられる。

まず、**タブレットの使用そのものが授業の目的となってしまう**点である。今年度は1人1台タブレットの導入1年目ということもあり、積極的に授業でタブレットを活用することを推し進めてきた。しかし、「タブレットを使う」ことそのものが授業の目的となってしまう、活動を通して生徒に何を学ばせたいのか、どんな生徒を育てたいのかという視点で教材研究ができていないケースがあった。一番の原因は、タブレットやその他ICT機器の特性を理解できていないことであるが、タブレットを使った授業の経験や教員間の情報共有の拡大によって解消されると考える。まずは実際に使用し、そこで得た経験を学校全体で共有していくことで、教員のICTへの理解度を高めていきたい。

次に、**タブレットを活用した活動の評価基準と評価方法**である。タブレット使用の有無に関わらず、生徒の主体性や思考力・表現力を適切に評価しようとするれば、評価の客観性、信頼性、妥当性、効率性が求められる。そのためには、さらに評価基準を綿密に作成する必要がある。タブレットの導入により、これまで以上に主体的・対話的で深い学びを意識した授業の実践が進んでいくと考えられる。また、タブレットの活用によって教育活動の幅は広がり、さまざまな形で生徒を評価する必要が出てくると考えられる。ICTの効果的な活用とともに指導と評価の一体化を目指して、評価についても継続して研究していきたい。

保護者や学校評議員の方々からは、「子どもからタブレットを活用した協働学習の実践等について



は聞いている。また、コロナ禍で自宅待機を余儀なくされている子どもたちにとって、オンライン授業の実施はありがたい。学校の取組は大変有意義であるので、今後も継続していただきたい。」等のご意見をいただいている。ICTの活用は学習支援として有効であるだけでなく、アンケートの集計等における教員の多忙化解消他、生徒の思考力の育成や表現力の醸成等においても欠かせない。今後、ICTの活用を進めていく中で多くの課題と直面することになると考えられるが、失敗を恐れず、さまざまなチャレンジをし続けていくことが大切であると感じている。本事業を通して得た知見と技術をもって主体的・対話的で深い学びを実現する授業を来年度以降も実施し、生徒一人一人の更なる成長に向けて、学校全体で一丸となって取り組んでいきたい。